

2020年度入試結果速報

2020年度入試では国公立大、私立大ともに志願者が減少した。国公立大ではメイン入試である前期日程の志願者数が過去最少、私立大の志願者数も14年ぶりの減少となる見込みである。

最大の要因は18歳人口減による大学志願者数の減少である。ここにセンター試験の平均点ダウン、入試改革前年という要素が加わり志願者減が加速した。今春は既卒生の減少が目立つのも特徴で、医学科や難関私立大志願者の減少につながった。

18歳人口は今後も減少が続く。大学入試は競争緩和の局面に入ったといえるだろう。

以下、今春のセンター試験の概況と3月6日時点で判明している大学の志願状況をレポートする。

2020年度入試の概観

- ▶ 大学志願者数は減少
- ▶ 最後のセンター試験、平均点はダウン
- ▶ 国公立大の状況
 - 志願者数減少、競争緩和へ
 - 難関大に敬遠の動き見られず
- ▶ 私立大の状況
 - 志願者数は14年ぶりの減少
 - 近年の難化の影響色濃く、難関大は敬遠傾向

Part 1

大学入試センター試験概況

志願者数・受験者数ともに減少

最後となる2020年度大学入試センター試験（以下、センター試験）が1月18・19日の2日間にわたり、全国689カ所の試験会場で実施された。

<図表1>はセンター試験の志願者・受験者数推移である。今年度の志願者数は557,699人（前年比97%）と前年から約2万人減少した。受験者数も527,072人（前年比96%）と、こちらも前年から約2万人減少、いずれも2年連続の減少となったほか、減少幅は過去最大となった。

減少の主な要因は18歳人口減による大学志願者数の減少である。今春の高等学校等新規卒業生は前年から1万2千人ほど減少したと推定される<図表2>。また、入試改革を翌年に控えており、入学大学を早期に確実に決定したい心理から推薦・AO入試などセンター試験を利用しない入試を経ての大学進学者が増加したことも要因であろう。

既卒生の減少も今年の特徴である。センター試験の志

願者数の内訳をみると、今春は高等学校等卒業生（既卒生）の減少率が高いことが目に留まる<図表2>。近年、私立大入試の難化などの影響から、既卒志願者は増加し

<図表1>センター試験 志願者・受験者数推移

年度	志願者数 (前年比)	受験者数 (前年比)	受験率
2011	558,984 (101%)	527,793 (101%)	94%
2012	555,537 (99%)	526,311 (100%)	95%
2013	573,344 (103%)	543,271 (103%)	95%
2014	560,672 (98%)	532,350 (98%)	95%
2015	559,132 (100%)	530,537 (100%)	95%
2016	563,768 (101%)	536,828 (101%)	95%
2017	575,967 (102%)	547,892 (102%)	95%
2018	582,671 (101%)	554,212 (101%)	95%
2019	576,830 (99%)	546,198 (99%)	95%
2020	557,699 (97%)	527,072 (96%)	95%

※大学入試センター資料より
 ※受験率は受験者数/志願者数

<図表2>センター試験 志願者数の内訳

	19年度	20年度	前年差	前年比
センター試験志願者数	576,830	557,699	-19,131	97%
高等学校等卒業見込者(現役生)	464,950	452,235	-12,715	97%
高等学校等卒業生(既卒生)	106,682	100,376	-6,306	94%
その他	5,198	5,088	-110	98%
(参考) 高等学校等新規卒業生数	1,055,807	1,043,359	-12,448	99%

※大学入試センター資料より、2019年度の「高等学校新規卒業生数」は学校基本調査より

<図表3>センター試験 主要教科・科目平均点・受験者数(本試験)

教科・科目名		平均点			受験者数		
		19年度	20年度	前年差	19年度	20年度	前年比
外国語	英語(筆記)	123.30	116.31	-7.0	537,663	518,401	96%
	リスニング	31.42	28.78	-2.6	531,245	512,007	96%
数学①	数学I	36.71	35.93	-0.8	5,362	5,584	104%
	数学I・数学A	59.68	51.88	-7.8	392,486	382,151	97%
数学②	数学II	30.00	28.38	-1.6	5,378	5,094	95%
	数学II・数学B	53.21	49.03	-4.2	349,405	339,925	97%
国語		121.55	119.33	-2.2	516,858	498,200	96%
理科①	物理基礎	30.58	33.29	+2.7	20,179	20,437	101%
	化学基礎	31.22	28.20	-3.0	113,801	110,955	97%
	生物基礎	30.99	32.10	+1.1	141,242	137,469	97%
	地学基礎	29.62	27.03	-2.6	49,745	48,758	98%
理科②	物理	56.94	60.68	+3.7	156,568	153,140	98%
	化学	54.67	54.79	+0.1	201,332	193,476	96%
	生物	62.89	57.56	-5.3	67,614	64,623	96%
	地学	46.34	39.51	-6.8	1,936	1,684	87%
地理歴史	世界史A	47.57	51.16	+3.6	1,346	1,765	131%
	世界史B	65.36	62.97	-2.4	93,230	91,609	98%
	日本史A	50.60	44.59	-6.0	2,359	2,429	103%
	日本史B	63.54	65.45	+1.9	169,613	160,425	95%
	地理A	57.11	54.51	-2.6	2,100	2,240	107%
	地理B	62.03	66.35	+4.3	146,229	143,036	98%
公民	現代社会	56.76	57.30	+0.5	75,824	73,276	97%
	倫理	62.25	65.37	+3.1	21,585	21,202	98%
	政治・経済	56.24	53.75	-2.5	52,977	50,398	95%
	倫理,政治・経済	64.22	66.51	+2.3	50,886	48,341	95%

※大学入試センター資料より

ていたが、今春は4年ぶりの減少となった。2019年度入試では私立大の合格者は3年ぶりに増加しており、これが入学者の増加、ひいては今春の既卒受験生の減少につながったものと推測する。

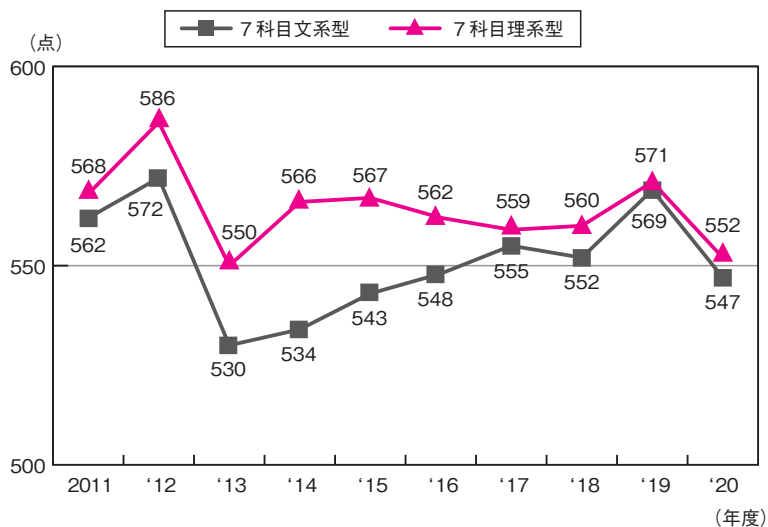
**科目別平均点の変化
英・数・国の3教科でダウン**

<図表3>は大学入試センターが公表した主な科目の平均点と受験者数の一覧である。

英語では「筆記」「リスニング」ともに平均点が昨年よりダウンした。数学でも、「数学I・数学A」「数学II・数学B」ともに平均点がダウンした。とくに「数学I・数学A」については、7.8点と大幅にダウンしており、現行課程に移行した2015年度以降最低点となった。大学入学共通テスト導入を翌年に控え、今年のセンター試験にも一部で新しい形式の出題や、大学入学共通テストを意識したような出題がみられた。なかでも「数学I・数学A」は、複雑な設定で解答方針が立てにくい問題や参考書等であまりみかけない目新しい問題が出題され、苦戦した受験生が多かったようである。なお、国語でも平均点はダウンし、主要3教科はすべて平均点ダウンとなった。

理科①では、最も受験者の多い「生物基礎」の平均点が昨年より1.1点アップしたが、次に受験者の多い「化学基礎」の平均点は昨年より3.0点ダウンした。理科②では、受験者の多い「物理」の

＜図表4＞センター試験 7科目型平均点推移



※7科目型平均点は河合塾推定
 7科目文系型：英・数(2)・国・理(1)・地公(2) (900点満点)
 7科目理系型：英・数(2)・国・理(2)・地公(1) (900点満点)
 *英語は筆記+リスニングの250点を200点に換算して集計
 *理科①は2科目で1科目とする

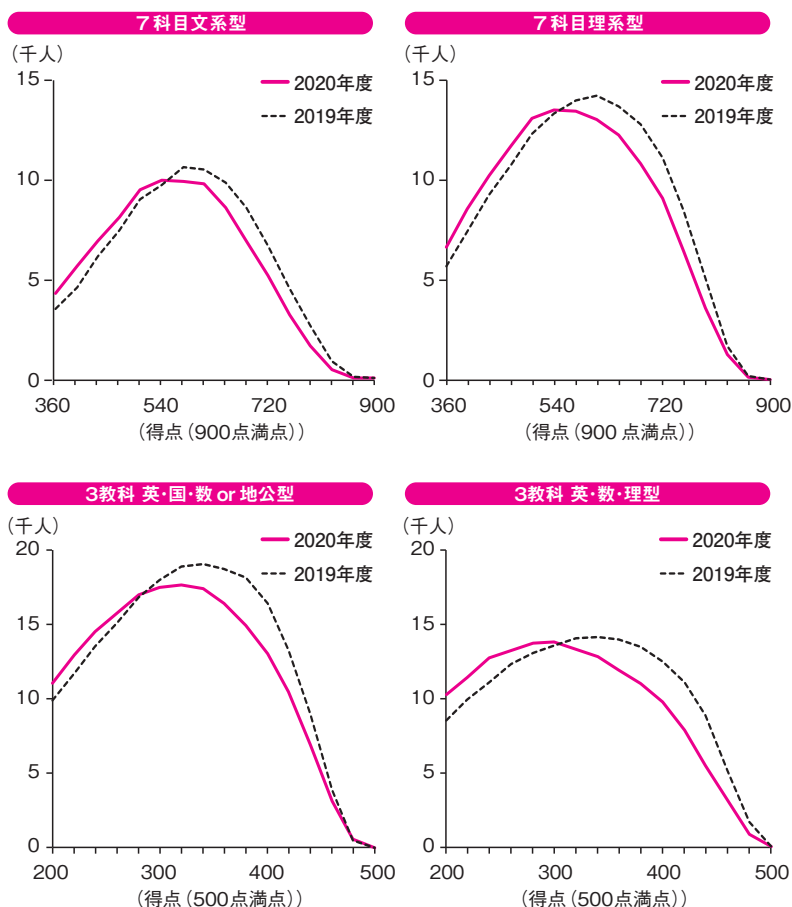
平均点が昨年から3.7点アップした。地理歴史・公民では、「地理B」「倫理,政治・経済」などで平均点がアップした。4単科目の平均点は、昨年に引き続きいずれも6割を超えている。なお、得点調整は実施されなかった。

7科目型平均点は文理ともにダウン中～高成績層の受験者が減少

＜図表4＞は河合塾が推定するセンター試験7科目型の平均点推移である。今年度の平均点は7科目文系型(900点満点)が547点(前年差-22点)、7科目理系型(900点満点)が552点(前年差-19点)となった。

英語、数学、国語の主要3教科の平均点ダウンが影響した。なお、7科目理系型では、「物理」や受験者の多い「地理B」などで平均点がアップしており、7科目文系型に比べ平均点のダウン幅が小さくなった。

＜図表5＞「センター・リサーチ」 7科目型、3教科型受験者の成績分布



＜図表5＞は河合塾が実施した自己採点集計「センター・リサーチ」参加者の成績分布である。

7科目型では、文系・理系型とも540点(得点率6割)以上の得点層が昨年から減少しており、グラフは大きく左側にシフトした。また、得点率8割以上の高得点層は文系型で約3割減、理系型で約2割減となった。今年のセンター試験は平均点がダウンしただけでなく、高得点が取りにくい状況だったことがうかがえる。

3教科型の得点分布をみても、7科目型同様、いずれも300点(得点率6割)以上の得点層が昨年から減少し、グラフも左側にシフトした。とくに、理系生がおもに受験する「英・数・理型」では「英・国・数 or 地公型」に比べ、成績上位層の減少が目立ち、グラフも7科目型などと比べてもシフトした幅が大きい。科目数が少ない分、英語、数学の平均点ダウンが大きく影響した。

Part 2

国公立大学の志願状況

**国公立大志願者数は大きく減少
前期日程は過去最少**

国公立大入試の中心となる前期日程の志願者数は243,052人（前年比94%）と大きく減少<図表6>、前期日程として過去最少となった^(注)。前述のとおり、今春の大学志願者数は減少したものと推測しており、国公立大入試もこの影響を受けた形だ。センター試験の平均点ダウンも減少に拍車をかけた。

全体の志願者が減少したなか、志願者数が増加した大学もあった。前年入試で志願者数が減少していた大学のほか、志願倍率（志願者／募集人員）が2.0倍以下の低倍率入試となっていた大学などである。難関大を敬遠する動きはみられなかったものの、合格の可能性が高そうな大学に出願するという点で、安全志向がうかがえた。

後期日程は前年比92%と前期日程以上の減少幅となった。2020年度も後期日程廃止・縮小の動きが続いていることに加え、ボーダーラインが高い後期日程は前期日程以上に出願しにくかったとみる。また、中期日程は前年比99%と前年並みとなった。近年中期日程を新規実施する大学が増えており、出願先が増えていることが要因である。

<図表7>は、大学所在地区別の志願状況をまとめたものである。多くの地区で志願者が減少し、とりわけ北関東、東海、近畿、九州地区で減少率が高くなった。

例外的に志願者が増加したのが、北海道、四国地区であった。北海道地区では2019年春に公立大学法人化した公立千歳科学技術大が今春から分離分割方式で入試を

実施したことに加え、室蘭工業大などで志願者が増加したためである。室蘭工業大は前年実質倍率が1.6倍と低倍率だった理工学部システム理化学科で志願者が倍増した。四国地区では徳島大が前年比114%と志願者が増加したが、こちらも前年低倍率だった学部で増加した。

<図表6> 国公立大志願状況

区分	日程	募集人員		志願者数				志願倍率	
		19年度	20年度	19年度	20年度	前年差	前年比	19年度	20年度
国立	前期	64,031	63,828	194,525	182,772	-11,753	94%	3.0	2.9
	後期	14,335	14,168	135,628	124,420	-11,208	92%	9.5	8.8
	計	78,366	77,996	330,153	307,192	-22,961	93%	4.2	3.9
公立	前期	16,102	16,223	64,010	60,280	-3,730	94%	4.0	3.7
	後期	3,648	3,572	43,986	40,667	-3,319	92%	12.1	11.4
	中期	2,310	2,355	31,687	31,426	-261	99%	13.7	13.3
	計	22,060	22,150	139,683	132,373	-7,310	95%	6.3	6.0
国公立計	前期	80,133	80,051	258,535	243,052	-15,483	94%	3.2	3.0
	後期	17,983	17,740	179,614	165,087	-14,527	92%	10.0	9.3
	中期	2,310	2,355	31,687	31,426	-261	99%	13.7	13.3
	計	100,426	100,146	469,836	439,565	-30,271	94%	4.7	4.4

※文部科学省資料より ※志願倍率は志願者数／募集人員
※分離・分割方式ではなく独自日程で実施する大学は上表には含まれていない

<図表7> 国公立大（前期日程）地区別志願状況

地区	19年度	20年度	前年差	前年比
北海道	12,297	12,584	+287	102%
東北	20,776	19,376	-1,400	93%
北関東	14,249	13,108	-1,141	92%
南関東	51,502	48,741	-2,761	95%
甲信越	12,827	12,213	-614	95%
北陸	22,619	21,057	-1,562	93%
東海	11,283	10,221	-1,062	91%
近畿	43,531	39,697	-3,834	91%
中国	23,862	22,872	-990	96%
四国	10,723	11,000	+277	103%
九州	34,866	32,183	-2,683	92%

※文部科学省資料より
※北関東：茨城・栃木・群馬 南関東：埼玉・千葉・東京・神奈川

(注) 前期日程とA日程の両方を実施していた期間（1989～1998年度入試）は、A日程志願者数を含んだ数字と比較。

学部系統別の志願状況 「社会科学」「医療」で減少目立つ

＜図表8＞は国公立大の前期日程の志願状況を、学部系統別に集計したものである。国公立大全体で志願者が減少したこともあり、「総合・環境・人間・情報」を除き、いずれの系統も志願者が減少した。とくに社会科学系、医療系などで減少率が高くなった。一方、理系では「理」「工」では減少率は小幅、「農」も国公立大全体と同率となっており、堅調な人気を示した。

以下に、主な系統について確認していく。なお、文中の志願者数・前年比は特に記載がない場合、前期日程を表す。

文・人文学系

系統全体の志願者数は前年比94%となった。難関大のなかでも北海道大(文)、東北大(教育)、名古屋大(教

育)、九州大(教育)などでは前年から2～3割減となった。いずれも前年志願者が増加しており警戒された形だ。一方、東北大(文)、大阪大(外国語)、神戸大(文)など前年志願者が減少した大学では今春の志願者は増加しており、前年の反動が目立った。

社会科学系(社会・国際、法・政治、経済・経営・商)

社会科学系3系統の志願者数はいずれも1割前後減少した。「社会・国際」では、国際系学部・学科で志願者の減少が目立ったが、前年入試で志願者が増加した大学が多く、その反動が出た形だ。

「法・政治」では東京大(文一)、一橋大(法)、京都大(法)などが前年並みかやや増の志願者を集めた一方、北海道大(法)119%→66%、東京都立大(法)137%→69%、大阪大(法)128%→73%、島根大(法文—法経)65%→202%など、志願者数が前年から極端な増減を示す大学も目立った(数字は志願者前年比、19

＜図表8＞国公立大(前期日程)学部系統別志願状況

系統	募集人員		志願者数				志願倍率	
	19年度	20年度	19年度	20年度	前年差	前年比	19年度	20年度
文・人文	7,025	7,038	23,387	21,946	-1,441	94%	3.3	3.1
社会・国際	4,021	3,969	14,739	12,912	-1,827	88%	3.7	3.3
法・政治	4,163	4,158	13,995	12,796	-1,199	91%	3.4	3.1
経済・経営・商	8,146	8,119	28,438	25,702	-2,736	90%	3.5	3.2
教育—教員養成課程	7,281	7,172	19,056	17,606	-1,450	92%	2.6	2.5
教育—総合科学課程	828	838	2,486	2,122	-364	85%	3.0	2.5
理	4,967	4,907	14,604	14,036	-568	96%	2.9	2.9
工	22,799	22,864	69,016	67,082	-1,934	97%	3.0	2.9
農	5,574	5,651	16,455	15,469	-986	94%	3.0	2.7
医・歯・薬・保健	10,572	10,529	37,851	34,754	-3,097	92%	3.6	3.3
医	3,635	3,581	16,390	14,735	-1,655	90%	4.5	4.1
歯	447	450	1,824	1,657	-167	91%	4.1	3.7
薬	756	752	2,859	2,620	-239	92%	3.8	3.5
看護	3,930	3,931	11,256	10,321	-935	92%	2.9	2.6
医療技術・他	1,804	1,815	5,522	5,421	-101	98%	3.1	3.0
生活科学	789	788	2,612	2,424	-188	93%	3.3	3.1
芸術・スポーツ科学	1,580	1,582	7,502	7,319	-183	98%	4.7	4.6
総合・環境・人間・情報	2,395	2,493	8,399	8,805	+406	105%	3.5	3.5
国公立 計	80,140	80,108	258,540	242,973	-15,567	94%	3.2	3.0

※河合塾調べ(大学発表の数値と文部科学省資料の数値が異なる場合は大学発表値を優先)
※系統の分類は河合塾による

年度→20年度)。

「経済・経営・商」では2年連続の志願者減となった。東北大(経済)(前年比83%)、東京大(文二)(同94%)、一橋大(経済 同78%、商 同90%)、大阪大(経済)(同89%)など、難関大でも志願者減少が目立った。反対に志願者の増加率が高かった大学は、釧路公立大(経済)、高崎経済大(経済)、神戸大(経営)、長崎県立大(経営)などであるが、これらはいずれも前年入試で志願者が減少した大学であった。

自然科学系(理、工、農)

志願者数の減少幅は他の学部系統に比べ小幅となった。「理」では、東北大(理)、神戸大(理)で2年連続の志願者増、大阪大(理)では前年に1割増となっていた志願者数を今年も維持するなど、難関大では前年の反動を感じさせない大学もみられた。

「工」の志願者前年比は97%であった。前述の室蘭工業大のほか、富山大(都市デザイン)、公立諏訪東京理科大などで志願者が大きく増加した。富山大は2次試験の配点が高い材料デザイン工学科bの志願者が倍増した。公立諏訪東京理科大では学部全体で前年の2倍以上の志願者が集まり、なかでも機械電気工学科B方式は前年の4倍を超える志願者が集まり、今春の志願倍率は8.0倍となった。

「農」では、県立広島大で生物資源科学部が新設された。志願倍率は3.3倍となり、「農」全体より高倍率となった。また、2次試験が2教科から1教科となった山口大(農)では志願者は前年比112%と大きく増加した。なお、難関10大学では北海道大(獣医)、東北大(農)、神戸大(農)、九州大(農)などで志願者は前年から1割以上減少するなど、人気低調な大学が目立った。

医療系(医・歯・薬・保健)

医療系全体の志願者数は前年比92%と大きく減少した。なかでも前年比90%の「医」では、6年連続の志願者減となっており、人気回復の兆しはみられない。医学科では前年から2割以上志願者が減少した大学数も前年の10大学から18大学に増加した。「薬」も前年比92%と減少した。減少した大学が目立つなか、九州大(薬)では前年の反動から前年比128%と増加した。また、大阪大(薬)は2019年度入試で前年から1割増となっていた志願者数を今春も維持した。「看護」では全体の6

割に当たる募集区分で志願者が減少した。一方、前年大きく志願者が減っていた大学、低倍率だった大学では志願者が大きく増加した大学もみられた。

その他

「総合・環境・人間・情報」の志願者は前年比105%と全系統中で唯一増加した。分野別にみると、「総合」「情報」で志願者が増加した。

「総合」では、新潟大(創生)、島根県立大(総合政策)、徳島大(総合科学)など、前年低倍率だった大学で志願者の増加が目立った。「情報」は福知山公立大(情報)、長崎大(情報データ科学)の2つの新設学部の影響で志願者が増加しており、既存の学部では減少したところも目立った。

難関国立大の志願状況 難関大敬遠の動き見られず

<図表9>は旧帝大を中心とした難関10大学の志願状況をまとめたものである。

難関10大学全体では、前期日程は55,211人(前年比95%)と減少した。国公立大全体に比べ減少率は小さく、難関大を極端に敬遠する動きはみられなかった。大学別にみると、大阪大で前年比99%、東京大、京都大で同98%と前年並みから微減となったほかは、いずれの大学も志願者前年比は大きくダウンしており、難関大の中でも差がみられた。また、10大学のうち7大学で志願者数が過去10年で最少となっており、今春は難関大でも競争の緩和が明瞭となった。

以下、難関10大学の状況を個別にみていく。

北海道大学

前期日程の志願者数は5,474人(前年比94%)となった。今春は文系学部で前年比91%と減少幅が大きい。文系学部では前年入試で志願者の増加が目立った文、教育、法の3学部で減少した。なかでも法学部では前年比66%と大きく減少した。一方で前年に志願者が大きく減少した総合入試文系では今春の志願者は前年から4割増となるなど、前年入試の反動が目立った。

理系学部でも前年の反動が目立った。前年志願者が増加した獣医、水産学部では志願者が減少、前年に志願者が減少していた医学部では前年比111%と大きく増加した。なかでも医学科の志願者は2割近く増加した。

＜図表9＞国公立大 難関10大学の志願状況

大学名	前期日程				後期日程			
	19年度	20年度	前年差	前年比	19年度	20年度	前年差	前年比
北海道	5,843	5,474	-369	94%	4,498	4,278	-220	95%
東北	4,813	4,384	-429	91%	1,439	1,354	-85	94%
東京	9,483	9,259	-224	98%	—	—	—	—
東京工業	4,222	3,790	-432	90%	497	512	+15	103%
一橋	2,687	2,490	-197	93%	1,123	1,075	-48	96%
名古屋	4,736	4,422	-314	93%	67	55	-12	82%
京都	7,511	7,347	-164	98%	514	352	-162	68%
大阪	7,536	7,462	-74	99%	—	—	—	—
神戸	5,933	5,569	-364	94%	4,026	3,746	-280	93%
九州	5,239	5,014	-225	96%	2,309	2,227	-82	96%
難関10大学計	58,003	55,211	-2,792	95%	14,473	13,599	-874	94%
その他大学計	200,532	187,841	-12,691	94%	165,141	151,488	-13,653	92%

※文部科学省資料より ※「その他大学計」は難関10大学を除いた国公立大計

後期日程の志願者は前年比95%と減少した。学部別では増加した学部もみられ、法、経済、農学部では2年連続で増加した。

東北大学

前期日程の志願者は前年比91%、2年連続の減少というだけでなく、過去20年で最少となった。経済学部では理系生を対象とした理系入試を導入した。これに伴い文系入試では募集人員が30名減、志願者も前年比76%と大きく減少した。一方、理系入試は募集人員10名に31人の志願者が集まった。志願倍率で比較すると、文系入試の2.2倍に対し、理系入試は3.1倍となった。臨時定員の返還により募集人員が28名減となった医学科でも志願者は前年比71%と大きく減少した。

後期日程では、経済学部で志願者は増加、理学部で減少した。経済学部では前期日程同様、理系入試を導入した。募集人員10名に対し、前期日程を上回る58人の志願者が集まった。理学部は前年入試で大きく志願者が増加しており、その反動が出た。

東京大学

大学全体の志願者数は98%とやや減少した。東京大でも過去10年で最少の志願者数となった。科類別では文科一類、理科一類で前年並み、理科三類でわずかながら志願者は増加した。文科一類では前年まで3年連続で

増加していた志願者数を維持した。

一方、文科二類・三類、理科二類では志願者は減少した。文科二類では2019年度入試で合格者の平均点・最低点とも文科一類を上回っており、警戒された形だ。

第1段階選抜は全科類で実施された。志願者が減少した科類では、合格最低点が前年から大幅にダウンした。

東京工業大学

前期日程の志願者数は前年比90%、難関10大学のなかで最も高い減少率となった。理学院で前年並みの志願者数となったほかは、いずれの学院も減少した。なかでも工学院（前年比84%）、環境・社会理工学院（同82%）で減少率が高かった。志願倍率をみると、今春も情報理工学院が9.1倍と群を抜いて高く、一番人気となった。

生命理工学院のみで実施する後期日程では、志願者数は前年比103%と2年連続で増加した。

一橋大学

前期日程の志願者数は前年比93%と2年連続で減少、過去20年でみても最少となった。学部別にみると、社会（前年比103%）、法（同101%）、経済（同78%）、商（同90%）となった。社会科学系の不人気もあり、年間を通じて人気を感じられなかった一橋大であるが、社会、法学部では前年並みからやや増の志願者数となった。社会学部の志願者増は前年入試の反動による。また、

法、経済学部の動向は東京大（文一・文二）と同様となった。

後期日程では、志願者数は前年比96%と減少した。こちらも2年連続の減少となった。

名古屋大学

前期日程の志願者数は前年比93%と減少、過去10年で最少となった。学部別にみても医学部を除く全学部で志願者が減少した。医学部医学科では今春から2段階選抜を廃止した影響で、志願者は前年比118%と大きく増加した。一方、教育学部では前年に入試科目の変更で志願者数が倍増していた反動で今春は前年比64%と大幅に減少した。工学部では学部全体の志願者が減少したなか、電気電子情報工学科では前年比107%と増加した。情報学部では2年連続の志願者減となった。なかでも人間・社会情報学科で前年比70%と減少率が高くなった。

医学部医学科のみで実施される後期日程は前年比82%と減少した。

京都大学

前期日程の志願者数は前年比98%、7年連続の減少となった。前年入試で志願者が減少していた法、経済学部では、今春は増加に転じた。一方、3年連続の志願者増となっていた文学部は、今春は前年比96%と減少した。また総合人間学部は4年連続の志願者減となった。理系学部では工学部で前年比103%と志願者が増加、なかでも情報学科で同114%と大きく増加した。理学部では、志願者は2019年度入試で前年から1割増となっていたが、今春は減少に転じ、一昨年志願者数に戻った。

後期日程で実施される法学部特色入試では、前年入試で特色入試開始以来最多の志願者が集まったが、今春はその反動で前年比68%と大きく減少した。

大阪大学

前期日程の志願者数は前年比99%、前年並みとなった。文系学部では、文、外国語学部で志願者が増加した。一方、2019年度入試で志願者が増加していた法、経済学部では減少した。とくに法学部では前年比73%、志願倍率は2倍を切った。法学部では近年極端な隔年現象を起こしており、次年度は志願者の大幅増加が警戒される。

理系学部でも前年の反動がみられた。前年志願者が減少した工学部は今年は増加し、前年志願者が増加してい

た基礎工学部では今年は減少した。なお、医学部では医学科で前年比121%と志願者が大きく増加した。第1段階選抜の基準が緩和されたことに加え、今春から2次試験の配点比率が高くなった。センター試験の平均点ダウンにより2次逆転を狙う医学科志望者が集まったものと推測する。

神戸大学

前期日程の志願者数は94%と減少した。前年は理系学部を中心に京都大、大阪大を敬遠した受験生の受け皿となり、難関10大学の中では唯一志願者が増加していたが、今春はその反動もあり、減少率は高めとなった。

文系学部では、前年まで4年連続で志願者増となっていた経済学部で志願者が大きく減少、代わって経営学部で前年比120%と大きく増加した。また2年連続で志願者減となっていた文学部でも志願者が増加した。理系学部では、前年の反動で理学部を除くすべての学部で志願者が減少した。なかでも医、海事科学、農学部で減少率が高くなった。

後期日程の志願者数も93%と減少した。ただし、前年の反動で志願者が減少した学部がある一方、理、工、医学部では2年連続の志願者減となった。

九州大学

前期日程の志願者数は前年比96%となった。教育、理、農、歯学部など前年志願者が増加していた学部で減少した一方、前年入試で志願者が減少していた法、薬学部では志願者増と、前年の反動が目立った。今春学科を改組した芸術工学部では志願者は前年比95%と、2年連続の志願者減となった。募集区分別に志願倍率をみると、1年次修了時点で所属コースを決定する学科一括入試で最も低くなった。医学科では志願者は前年比76%と大きく減少した。前年の志願者が大きく増加していたことに加え、今春は第1段階選抜の実施予告倍率を4倍から2.5倍に引き下げたことが要因となった。

後期日程の志願者は前年比96%となった。学部別では文、法、農、薬学部で前年入試の反動が目立った。なかでも前年の志願者が半減していた農学部では今春は前年比139%まで増加と増減幅が大きく、来春も注意が必要であろう。

私立大志願者数は減少 センター方式では高い減少率

私立大入試については、志願者を調査した全国108大学の集計（3月6日時点）から検証する。この108大学の2019年度入試の志願者数の合計は私立大全体の志願者数の7割を超えており、今春入試の概観は現段階でも十分につかめるものと考えられる。

108大学の一般入試の志願者数は、全体で前年比95%と前年から約16万人減少した<図表10>。私立大の志願者数は14年ぶりの減少となる可能性が高い。

志願者減少の要因は次の3点である。1点目は前述のとおり大学志願者数自体の減少。2点目は、近年私立大入試の難化が続いたこと。2016年度以降、私立大では都市部の大規模大を中心に、定員超過是正を目的として

合格者数を大きく減らす動きがみられ、難化傾向にあった。2019年度入試ではすでに定員超過率の適正化を完了した大学もあり、私立大全体の合格者数は3年ぶりに増加したが、志願者数も増加したため倍率（志願者／合格者）は上昇、難化したケースが目立った。今春は、前年入試で難化した大学の出願に消極的な様子が見られた。3点目は、大学入学共通テストの導入をはじめとする入試改革を翌年に控え、受験生の安全志向が高まったこと。入試改革については、英語資格・検定試験に関する諸課題や大学入学共通テスト記述式問題の導入延期など、方向性が定まらないことが不安感に輪を掛けた。このため、前述の通り私立大入試難化の影響から、一般入試を受験せず推薦・AO入試などで早期に進学先を決めた受験生が例年以上に多かったようだ。

方式別にみると、一般方式では前年比98%と微減に

<図表10> 私立大 大学グループ別志願状況

	一般方式				センター方式				合計				
	18年度	19年度	20年度	20/19	18年度	19年度	20年度	20/19	18年度	19年度	20年度	20/19	
主要108大学 計	1,955,850	1,962,414	1,929,422	98%	903,746	984,408	859,868	87%	2,859,596	2,946,822	2,789,290	95%	
主な内訳	早慶上理	212,915	200,291	190,163	95%	35,342	41,431	35,378	85%	248,257	241,722	225,541	93%
	MARCH	308,375	292,974	282,024	96%	156,514	154,893	128,656	83%	464,889	447,867	410,680	92%
	成成明國武	71,688	72,518	68,731	95%	43,159	46,462	33,329	72%	114,847	118,980	102,060	86%
	日東駒専	196,512	202,072	202,962	100%	121,256	122,690	90,389	74%	317,768	324,762	293,351	90%
	首都圏理系10大学	159,509	170,705	179,268	105%	101,293	116,453	119,970	103%	260,802	287,158	299,238	104%
	首都圏女子14大学	45,243	48,353	46,368	96%	30,595	34,993	24,624	70%	75,838	83,346	70,992	85%
	関関同立	206,395	194,256	192,164	99%	83,753	84,692	81,577	96%	290,148	278,948	273,741	98%
	産近甲龍	210,389	212,106	203,183	96%	62,615	71,472	66,402	93%	273,004	283,578	269,585	95%
	北星学園・北海学園	6,143	6,315	7,310	116%	2,642	3,545	3,564	101%	8,785	9,860	10,874	110%
	東北学院	6,561	6,609	6,349	96%	3,620	4,119	3,589	87%	10,181	10,728	9,938	93%
	南山・愛知・中京・名城	75,363	72,410	72,530	100%	44,132	45,911	44,140	96%	119,495	118,321	116,670	99%
	西南学院・福岡	46,794	45,763	47,599	104%	23,661	26,813	25,810	96%	70,455	72,576	73,409	101%

※数値は3/6現在、河合塾集計（20年度の志願者数が未公表・確定前の方式は集計対象外）

※大学グループ

早慶上理：早稲田・慶應義塾・上智・東京理科 MARCH：明治・青山学院・立教・中央・法政
 成成明國武：成蹊・成城・明治学院・國學院・武蔵 日東駒専：日本・東洋・駒澤・専修
 首都圏理系10大学：千葉工業・北里・工学院・芝浦工業・東京工科・東京電機・東京都市・東京農業・麻布・神奈川工科
 首都圏女子14大学：大妻女子・学習院女子・共立女子・白百合女子・実践女子・昭和女子・聖心女子・清泉女子・津田塾・東京女子・東京家政・
 日本女子・東洋英和女学院・フェリス女学院
 関関同立：関西・関西学院・同志社・立命館 産近甲龍：京都産業・近畿・甲南・龍谷

とどまった一方、センター方式では前年比87%と大きく減少した。今春は、センター試験の平均点が英語・数学・国語の主要教科を中心にダウンしたことも減少の一因である。とくに、センター試験日以降に出願可能なセンター方式では、志願者数が大きく減少した大学が散見された。また、2019年度入試では、併願先として受験負担の軽いセンター方式を活用して出願校を増やす動きがみられた。成績上位層が集まる結果となり、ボーダーラインが上昇し難化した大学も少なくない。こうした状況をふまえ、今春は合格可能性ラインの高いセンター方式の出願をあきらめた受験生が例年以上に多い様子うかがえた。

志願者が減少した大学が目立つなか、郊外から都心へキャンパスが移転する大学では志願者の増加がみられた。専修大では、川崎市から都内の神田キャンパスへ移転する商学部で志願者が増加した。このほか、通学キャンパスを再編する愛知学院大でも、経営、商学部で志願者が増加した。

合格者数の状況についても軽く触れておきたい。現時点（3月6日）で合格者数が判明したのは一部の大学に限られるが、その数は前年比101%となっている。大学別にみると、志願者が大きく減少した一方で前年並みまたは前年を上回る合格者数となった大学もみられた。また、2019年度入試では正規合格者を減らし、補欠・追加合格で入学者数を調整するケースが目立ったが、今春も同様に正規合格を慎重に出している様子うかがえ、総合合格者数は今後さらに増加するだろう。今春は近年起こったような合格者数の大幅な減少はみられず、私立大全体の倍率（志願者／合格者）は下降すると推測する。詳細は、本誌6月号でご報告したい。

難関大グループでは軒並み減少 前年入試の反動で大幅減の大学も

大学グループ別に志願状況をみると、首都圏の各グループでは、「首都圏理系10大学」を除き軒並み減少した。とりわけセンター方式で大きく減少したことが特徴である。首都圏では、センター試験の受験者数自体の減少も目立ち、近年のセンター方式の難化の反動がうかがえた。志願者の増加が続いていた「日東駒専」グループ全体では、前年から1割減少した。大学別にみると、日本大では前年比112%と2019年度入試で志願者が大幅に減少した揺り戻しで増加したが、その他の3大学では

軒並み減少した。なかでも、駒澤大では前年から4割以上減少し、過去10年を遡っても最少の志願者数となった。2019年度入試でセンター方式の倍率が高騰したため、敬遠されたようだ。東洋大では、今春の志願者数も10万人を上回ったものの、1期（2月入試）で高い減少率を示し、志願者数は減少した。

西に目を向けると、「関関同立」「産近甲龍」グループでも志願者は減少したが、首都圏の主な大学グループと比較すると減少率は小幅となった。「産近甲龍」グループ全体では、2019年度入試までの10年間で志願者が約12万人も増加したが、今春は京都産業大を除く3大学で志願者が大きく減少した。なかでも、甲南大（同83%）では前年入試で倍率が高騰した反動からか、警戒された様子が見られた。

学部系統別 文系で志願者減が鮮明 理工学系は堅調な人気

<図表11>は、学部系統別の志願動向である。

今春は文系不人気は鮮明である。私立大全体の志願者数前年比95%を基準にみていくと、「人文科学」「社会科学」の2系統では、それより減少率が高くなった。

理系では、「理」「工」の志願者が増加し、堅調な人気うかがえた。大学別にみると、東京工科大では志願者が大きく増加（前年比132%）。コンピュータサイエンス、応用生物の2学部が今春2つの専攻を新設したことで志願者が集まった。そのほか、「工」では日本大、立命館大などで大きく志願者が増加した。「農」では志願者はやや減少したものの、他の学部系統と比べても減少率は小幅であった。

医療系に目をむけると、「歯」「薬」「医療技術」では志願者が前年から1割以上減少した。ただし、「医療技術」は、全学部に出願可能な方式を廃止した日本福祉大の志願者減の影響が大きく、日本福祉大を除く大学では前年並みの志願者数となった。「医」では、前年比93%と減少した。2019年度入試では医学科は志願者減少に加え、合格者数が増加したため倍率は大きくダウンしていた。今春は前年を下回る志願者数となり、競争はさらに緩和されたとみる。なお、東京医科大、聖マリアンナ医科大では、前年志願者が大きく減少した揺り戻しにより志願者が大幅に増加した。

<図表 11> 私立大 学部系統別志願状況

系統	一般方式				センター方式				合計				
	18年度	19年度	20年度	20/19	18年度	19年度	20年度	20/19	18年度	19年度	20年度	20/19	
人文科学系	333,771	330,753	315,346	95%	144,763	150,968	123,500	82%	478,534	481,721	438,846	91%	
社会科学系	833,219	826,096	790,489	96%	370,161	402,174	319,293	79%	1,203,380	1,228,270	1,109,782	90%	
理学系	39,321	42,466	43,499	102%	23,318	25,820	25,165	97%	62,639	68,286	68,664	101%	
工学系	388,064	409,367	428,268	105%	214,729	240,883	245,476	102%	602,793	650,250	673,744	104%	
農学系	63,816	60,270	59,838	99%	25,372	25,460	24,688	97%	89,188	85,730	84,526	99%	
医療系	医	44,773	41,789	39,052	93%	11,466	11,222	10,420	93%	56,239	53,011	49,472	93%
	歯	1,962	2,269	1,864	82%	942	1,099	865	79%	2,904	3,368	2,729	81%
	薬	34,461	30,786	27,689	90%	14,023	14,070	12,085	86%	48,484	44,856	39,774	89%
	看護	26,772	25,937	24,647	95%	10,064	11,061	10,246	93%	36,836	36,998	34,893	94%
	医療技術・他	11,984	11,678	11,467	98%	5,813	6,834	4,597	67%	17,797	18,512	16,064	87%
その他の学系	177,707	181,003	187,263	103%	83,095	94,817	83,533	88%	260,802	275,820	270,796	98%	

※数値は 3/6 現在、河合塾集計(20年度の志願者数が未公表・確定前の方式は集計対象外)

主な私立大の志願状況

<図表 12> は、各地区の主な私立大の志願状況である。いずれも、3月6日までに判明した入試の集計である。今春は、新入試を翌年に控え、例年と比べて志願動向に影響を及ぼすような変更が少ない入試といえるが、過去の入試の反動により志願者の増減が激しい大学・学部が目立った。

志願者減少が目立つ状況ではあるが、千葉工業大、東洋大、日本大、法政大、明治大、早稲田大、立命館大、近畿大の8大学が10万人を超える志願者を集めた。

以下、主な大学について状況を確認する。

青山学院大学

大学全体の志願者数は前年比96%と減少。方式別にみると、一般方式(前年比101%)、センター方式(同79%)となっており、センター方式で減少した。一般方式で前年の志願者を上回ったのは、首都圏の難関大グループ「早慶上理」「MARCH」では唯一である。一般方式の志願者増は、新設2年目となるコミュニティ人間科学部の志願者増(前年比152%)の影響が大きい。2019年度入試では他の文系学部と比べて低倍率だったこと、難易度が低かったことから、狙い目に感じた志願者が集中したようだ。そのほか、社会情報学部でも一般方式(前年比114%)、センター方式(同127%)とも

に増加した。情報分野の人気の高まりに加え、前年入試で志願者が減少した反動が要因と考える。

慶應義塾大学

大学全体の志願者数は前年比92%と大きく減少。今春の志願者数は4万人を割り込み、過去10年を遡っても最少となった。

学部別にみると、全学部で志願者が減少。なかでも、法(前年比88%)、経済(同88%)、看護医療(同86%)などでは高い減少率となった。理工学部では前年比95%と減少。減少幅は大きくないが、2015年度入試以降、志願者の減少が続いている。理工学部では、今春から学門の名称と構成を変更した。募集人員に対する志願者の倍率をみると、最も高い学門D(機械・システム分野)が13.3倍、次いで学門C(情報・数学・データサイエンス分野)が13.0倍となった。ただし、最も低い倍率となった学門A(物理・電気・機械分野)でも12.1倍であり、例年以上に学門間の倍率差は小さくなっている。

上智大学

大学全体の志願者数は前年比94%と減少。2019年度入試では志願者数が前年から1割減少したが、今春はさらに減少した。

学部別にみると、総合グローバル(前年比114%)、総合人間科学(同100%)を除く全学部で志願者が減少

<図表12>主要私立大 志願状況

大学名	一般方式				センター方式				合計			
	18年度	19年度	20年度	20/19	18年度	19年度	20年度	20/19	18年度	19年度	20年度	20/19
北星学園	1,989	2,009	2,186	109%	769	1,112	1,167	105%	2,758	3,121	3,353	107%
北海学園	4,154	4,306	5,124	119%	1,873	2,433	2,397	99%	6,027	6,739	7,521	112%
東北学院	6,561	6,609	6,349	96%	3,620	4,119	3,589	87%	10,181	10,728	9,938	93%
千葉工業	48,069	53,298	61,270	115%	30,836	37,578	41,999	112%	78,905	90,876	103,269	114%
青山学院	49,855	46,287	46,683	101%	13,050	14,117	11,139	79%	62,905	60,404	57,822	96%
学習院	20,447	19,143	16,932	88%	—	—	—	—	20,447	19,143	16,932	88%
北里	11,069	9,903	9,553	96%	4,470	4,263	3,326	78%	15,539	14,166	12,879	91%
共立女子	4,784	5,399	5,851	108%	1,503	1,341	821	61%	6,287	6,740	6,672	99%
慶應義塾	43,301	41,875	38,454	92%	—	—	—	—	43,301	41,875	38,454	92%
工学院	12,331	14,407	13,819	96%	6,409	7,357	7,393	100%	18,740	21,764	21,212	97%
國學院	16,766	17,017	17,414	102%	7,991	12,454	8,534	69%	24,757	29,471	25,948	88%
国際基督教	1,448	1,255	1,292	103%	—	—	—	—	1,448	1,255	1,292	103%
国土館	14,127	14,239	13,898	98%	10,480	7,096	7,772	110%	24,607	21,335	21,670	102%
駒澤	25,095	26,517	19,682	74%	19,720	22,198	9,143	41%	44,815	48,715	28,825	59%
芝浦工業	25,193	25,410	23,788	94%	16,541	21,095	17,117	81%	41,734	46,505	40,905	88%
上智	31,181	27,916	26,156	94%	—	—	—	—	31,181	27,916	26,156	94%
昭和女子	8,530	8,239	7,717	94%	3,578	4,754	3,755	79%	12,108	12,993	11,472	88%
成蹊	13,075	14,430	13,805	96%	8,087	10,604	8,031	76%	21,162	25,034	21,836	87%
成城	11,569	11,257	8,649	77%	9,565	8,059	5,775	72%	21,134	19,316	14,424	75%
専修	27,618	33,246	33,320	100%	16,771	21,133	17,243	82%	44,389	54,379	50,563	93%
中央	47,593	49,378	48,408	98%	39,820	42,087	36,820	87%	87,413	91,465	85,228	93%
津田塾	2,112	2,258	2,123	94%	3,407	3,655	2,222	61%	5,519	5,913	4,345	73%
東京工科	7,258	8,036	10,713	133%	6,752	5,420	6,990	129%	14,010	13,456	17,703	132%
東京女子	5,663	5,282	4,883	92%	5,132	5,142	3,526	69%	10,795	10,424	8,409	81%
東京電機	14,603	18,425	19,715	107%	8,157	9,503	9,293	98%	22,760	27,928	29,008	104%
東京都市	11,520	13,547	12,766	94%	14,264	16,553	17,657	107%	25,784	30,100	30,423	101%
東京農業	22,635	20,843	19,959	96%	9,096	8,947	9,369	105%	31,731	29,790	29,328	98%
東京理科	37,678	37,713	36,944	98%	18,888	22,880	19,411	85%	56,566	60,593	56,355	93%
東洋	60,922	68,618	65,225	95%	54,222	52,674	36,197	69%	115,144	121,292	101,422	84%
日本	82,877	73,691	84,735	115%	30,543	26,685	27,806	104%	113,420	100,376	112,541	112%
日本女子	6,047	7,068	7,073	100%	4,904	6,544	4,587	70%	10,951	13,612	11,660	86%
法政	81,758	75,199	71,423	95%	40,741	40,248	32,204	80%	122,499	115,447	103,627	90%
武蔵	12,245	13,195	13,947	106%	5,835	5,675	4,855	86%	18,080	18,870	18,802	100%
明治	85,038	80,033	75,693	95%	35,241	31,722	27,002	85%	120,279	111,755	102,695	92%
明治学院	18,033	16,619	14,916	90%	11,681	9,670	6,134	63%	29,714	26,289	21,050	80%
立教	44,131	42,077	39,817	95%	27,662	26,719	21,491	80%	71,793	68,796	61,308	89%
早稲田	100,755	92,787	88,609	95%	16,454	18,551	15,967	86%	117,209	111,338	104,576	94%
愛知	15,593	14,901	15,654	105%	5,931	7,818	6,820	87%	21,524	22,719	22,474	99%
中京	21,494	19,069	19,591	103%	13,433	13,743	14,020	102%	34,927	32,812	33,611	102%
南山	16,803	16,964	15,641	92%	8,537	7,837	6,767	86%	25,340	24,801	22,408	90%
名城	21,473	21,476	21,644	101%	16,231	16,513	16,533	100%	37,704	37,989	38,177	100%
京都産業	34,206	36,327	36,354	100%	16,356	19,026	19,866	104%	50,562	55,353	56,220	102%
同志社	48,367	42,571	39,654	93%	10,229	11,180	10,292	92%	58,596	53,751	49,946	93%
立命館	59,111	57,209	63,786	111%	39,151	36,989	39,883	108%	98,262	94,198	103,669	110%
龍谷	42,499	44,479	42,571	96%	8,956	10,469	10,428	100%	51,455	54,948	52,999	96%
関西	70,639	68,985	66,474	96%	21,577	24,467	21,351	87%	92,216	93,452	87,825	94%
近畿	120,775	117,604	112,524	96%	30,700	33,089	29,068	88%	151,475	150,693	141,592	94%
関西学院	28,278	25,491	22,250	87%	12,796	12,056	10,051	83%	41,074	37,547	32,301	86%
甲南	12,909	13,696	11,734	86%	6,603	8,888	7,040	79%	19,512	22,584	18,774	83%
広島修道	4,922	5,122	5,379	105%	3,658	3,875	3,924	101%	8,580	8,997	9,303	103%
松山	5,778	5,749	5,256	91%	1,662	1,566	1,576	101%	7,440	7,315	6,832	93%
西南学院	13,205	12,826	13,304	104%	8,268	9,463	7,991	84%	21,473	22,289	21,295	96%
福岡	33,589	32,937	34,295	104%	15,393	17,350	17,819	103%	48,982	50,287	52,114	104%

※数値は3/6現在、河合塾集計(20年度の志願者数が未公表・確定前の方式は集計対象外)

した。総合グローバル学部では、前年入試で志願者が大きく減少し倍率がダウンした反動から志願者が集中した。一方で、法（前年比82%）では高い減少率となった。2019年度入試で志願者が増加した一方で合格者が大きく減少したため、敬遠されたようだ。方式別にみると、TEAP利用型では前年並みの志願者が集まっており、学科別方式で大きく減らした。

中央大学

センター後期を除く志願者数は、大学全体で前年比93%と減少。方式別にみると、一般方式（前年比98%）、センター方式（同87%）とセンター方式で大きく減少した。過去2年の入試では志願者が増加したが、今春入試では他大学と同様に減少に転じる可能性が高い。

学部別にみると、新設2年目となる国際経営（前年比68%）、国際情報（同48%）の減少率が高く、2学部あわせた減少数は大学全体の減少数の8割以上を占めている。とくに国際情報学部は、2019年度一般方式が他学部と比べて群を抜いて高倍率入試となったため、多くの受験生が敬遠したようだ。一方、前年入試で志願者が増え、倍率がダウンした文、法学部では前年を上回る志願者が増えた。

東京理科大学

大学全体の志願者数は、前年比93%と減少。方式別にみると、一般方式では概ね前年並みの志願者が増えた一方、センター方式では減少した。センター方式では、C方式（センタ併用）の志願者数が前年比77%と大きく減少。C方式はセンター試験日以降に出願が可能であり、平均点がダウンしたセンター試験の英語・国語を課すことから出願をとりやめた受験生が多かったようだ。

学部別にみると、経営学部の志願者が前年から3割減少し、大学全体の志願者減に大きな影響を及ぼした。近年志願者増が続いたため、敬遠された様子がみられる。一方、基礎工学部では志願者が増加。とくにセンターA方式での増加率が高く、2019年度入試が1倍台の低倍率入試となった材料工学科では志願者が前年から倍増した。

法政大学

大学全体の志願者数は前年比90%と2年連続で減少した。前年から約1万2千人減少したものの、今春も志願者数10万人強を維持した。方式別にみると、一般方

式（前年比95%）、センター方式（同80%）と他大学と同様にセンター方式で大きく減少した。過去2年の入試でセンター方式の倍率が上昇したため、敬遠された様子がうかがえる。

学部別にみると、社会（前年比105%）、経営（同112%）では志願者が増加した。2学部とも2019年度入試で志願者が大幅に減少した反動によるものと考えられる。一方、減少率が高いのは経済（前年比70%）、キャリアデザイン（同76%）、人間環境（同77%）などだが、なかでも経済学部では4千人を超える減少数となった。

明治大学

センター後期を除く志願者数は、大学全体で前年比92%と減少したものの、今春も10万人を超える志願者が増えた。方式別にみると、一般方式（前年比95%）、センター方式（同85%）とセンター方式で大きく減少した。

学部別にみると、状況は大きく異なる。政治経済学部では、前年入試の反動により志願者が前年から4割以上増加。なかでも、経済学科では学科全体で前年から3千5百人の志願者が増えた。2019年度入試で倍率が大きくダウンしたこと、他の文系学部・学科と比べて入試難易度が低かったことが志願者集中の要因と考える。一方、その他の学部では志願者は軒並み減少した。国際日本学部では、今春入試より英語資格・検定試験を利用する方式を新たに2方式導入したが、志願者の増加には至らなかった。

立教大学

大学全体の志願者数は、前年比89%と大きく減少した。方式別でみると、一般方式（前年比95%）、センター方式（同80%）とセンター方式での減少が大きい。

学部別にみると、コミュニティ福祉（前年比59%）、法（同81%）、経済（同82%）などでは志願者大幅減となった。また、一般方式では英語資格・検定試験を出願要件として利用するグローバル方式の志願者数が前年から半減した。グローバル方式は2016年度入試で導入され、2018年度入試までの3年間、志願者は増加してきた。今春は前年に引き続き減少したが、他の一般方式と比べて高倍率入試だったこと、一部の学部・学科を除き出願要件となる英語資格・検定試験の成績基準を前年から引きあげたことが志願者敬遠の要因と考える。

早稲田大学

大学全体の志願者数は前年比94%と2年連続で減少したが、今春も10万人を上回る志願者が集まった。方式別にみると、一般方式（前年比95%）、センター方式（同86%）とセンター方式で大きく減少した。早稲田大では、すべての学部の出願締め切り日がセンター試験後に設けられている。2019年度入試では、センター試験の平均点アップが後押しする形でセンター方式の出願数が増加した。今春は前年の志願者増の反動に加え、センター試験の平均点ダウンの影響により大きく減少した。

学部別にみると、志願者が増加したのは文（前年比102%）、基幹理工（同103%）の2学部のみ。どちらの学部も前年入試で倍率がダウンしたため、志願者が集まったようだ。文学部では、一般方式では減少したものの、英語4技能テスト利用型の志願者が前年から3割以上増加した。

同志社大学

大学全体の志願者数は前年比93%と減少。2019年度入試では志願者・合格者数ともに減少しており、極端な難化はみられなかったが、今春も引き続き敬遠された。方式別にみると、一般方式（前年比93%）、センター方式（同92%）と方式による偏りもなかった。

学部別にみると、文系学部では法、商（ともに前年比77%）などで志願者が大幅に減少した。他の文系学部と比べて難易度が高いことから警戒されたようだ。一方、政策学部では、志願者数は前年から約2割増加。2019年度入試で学部全体で約1千人の志願者減となり、倍率がダウンした反動によるものと推測する。ただし、今春の志願者数は2018年度入試の8割程度にとどまっている。理系学部では、理工学部で前年並みの志願者が集まったのに対し、生命医科学部では前年比91%と減少した。とくに、センター方式での減少率が高く（前年比78%）、前年入試で倍率が上昇した反動と考える。

立命館大学

大学全体の志願者数は、16年ぶりに10万人を超え、前年比110%と大幅に増加。「関関同立」グループ内で唯一の増加大である。方式別にみても、一般方式（前年比111%）、センター方式（同108%）と両方式で増加した。志願者増の要因は、2019年度入試で志願者減少

と合格者数増加に伴い、倍率が下がった反動によるものとする。

学部別にみると、前年が低倍率入試だった学部志願者が集まった様子がみられる。文系学部では、経営（前年比145%）、経済（同129%）、文（同120%）などで志願者が大幅に増加した。なかでも経営学部では、センター前期の志願者が倍増しており、今春入試は難化が推測される。理系学部に目を向けると、情報理工（前年比121%）、理工（同120%）、生命科学（同106%）では志願者が大きく増加した。

関西大学

大学全体の志願者数は、前年比94%と減少。なかでも、2019年度入試で志願者が増加したセンター方式では、前年から1割以上減少した。

学部別にみると、文系学部では、法（同105%）、経済（前年比103%）では前年を上回る志願者が集まった一方、その他の学部では軒並み減少した。法学部では、今春から学部個別日程において英語資格・検定試験を出願要件として利用する「英語外部試験利用方式」を新設。募集人員20名に対し、542人の志願者が集まった。理系3学部（環境都市工、化学生命工、システム理工）では、センター方式で志願者が増加した。環境都市工、システム理工学部では、今春入試よりセンター前期の教科・科目数が増え、負担が軽くなったことで志願者を集めたようだ。

関西学院大学

後期入試を除く大学全体の志願者数は、前年比86%と大きく減少。方式別にみても、一般方式（前年比87%）、センター方式（同83%）と他大学と比べても減少率の高さが目立つ。関西学院大では、過去2年志願者減少が続いてきたが、歯止めはかからなかった。

学部別にみると、前年並みの志願者を集めた国際（前年比100%）、文（同99%）、商（同99%）の3学部を除き、志願者が大幅に減少した学部が目立つ。なかでも、理工学部では前年から1割以上減少した。理工学部は近年志願者の増減を繰り返す隔年現象が続いており、今春は減少年にあたる。今春は新規方式を多数実施するなど増加要因となる入試変更もあったが、増加には至らなかった。